「教員のための博物館の日　in　大阪市立自然史博物館」実施報告書

１　事業概要

平成 24 年 8 月 17 日に、「教員のための博物館の日　in　大阪市立自然史博物館」を開催した。大阪市および大阪府の教育センターの協力のもと、夏の教員研修に組み込んで、様々な教員向けプログラムを提供し、教員が博物館を楽しみ、体験し、今後の博物館利用の契機をすることを目的にした。

２　実施場所　大阪市立自然史博物館

３　実施日時　平成 24 年 8 月 17 日（金）9 時半ー17 時

４　実施担当者　佐久間大輔、塚腰　実（大阪市立自然史博物館　学芸員）
釋　知恵子（大阪市立自然史博物館　教育スタッフ）

５　事業の目的と背景

博物館には学校の授業に役立つ素材がたくさん存在しているが、博物館に来ない教員や、興味が無い教員は、授業に役立つ素材に気づいておらず、また、理科や生物・地学の教員といえども、未開拓の素材が眠っていると言える。

国立科学博物館がすすめる「教員のための博物館の日」は、教員を無料招待し、さまざまな教員向けのプログラムを提供する日を設定することにより、気軽に教員が博物館に来て、博物館を楽しみ、学習資源としての博物館の活用方法を自ら体験することを主旨としている。この主旨に賛同し、教員が博物館を利用するきっかけの第一歩として、大阪市立自然史博物館でも平成 24 年度に初めて実施することにした。

企画段階では、ここ数年、学校の夏休みの期間中を利用した、大阪市の教育センター及び大阪府の教育センター主催の教員研修依頼を受けていることから、教育センターの研修も教員のための博物館の日に取り入れることにした。これにより、教員のための博物館の日の企画に教育センター側の意見を反映させ、学習内容との接点があり、学校での展開に直結するプログラム構成を企画することを目指した。また、教員のための博物館の日を、大阪市・大阪府双方の教育センターの夏の研修枠に入れて教員に案内し、教員が学校の業務として参加しやすい体制を作った。

６　教員のための博物館の日　in　大阪市立自然史博物館のプログラムの特長

① 体験を重視

まずは教員自らが楽しむことを目的に、体験型のプログラムを複数用意した。体験プログラムの内容は、幼児や小学校の低学年の子ども対象に実施している子どもワークショップ体験から、高校の学習内容を意識した「日本の樹林型を学ぶ植物園のガイドツアー」など、さまざまな校種の教員の興味に対応

できるようにした。子どもワークショップ体験は、普段、実際に子どもワークショップを運営しているスタッフが担当し、低年齢の子どもと対応するときに気をつけている実施側の考えも伝えることにした。

② 学芸員との出会いの場

体験プログラムのほとんどは、当館の学芸員が担当することにし、教員がなるべくたくさんの学芸員と出会えるようにした。博物館の資料として、標本はもちろん大切なものであるが、学芸員もまた、博物館の貴重な財産であることを感じてもらえるようにした。

7　事業の進行

①　企画

・大阪市教育センター・大阪府教育センターの職員と連携した研修プログラムの企画

教育センターからは、指導要領からキーワードとなるようなメニューや、研修としての希望を出してもらった。博物館側は、この希望を踏まえて、これまでに実施した教員向けプログラムや、すでにある貸出キットなど、既存のコンテンツを活用しながら、さまざまな校種の教員を受け入れられるように、企画した。

・大阪教育大学との連携

大阪教育大学では、科学技術振興機構の支援の下、大阪府教育委員会を中心に大阪市、堺市等各教育委員会と連携し、コア・サイエンス・ティーチャーを養成する事業に取り組んでいる。博物館での養成講座の講義依頼があり、教員のための博物館の日を説明した上で、これに一緒に参加してもらうことにした。

・他館への協力要請

大阪市内の施設にも学校向けの取り組みを紹介するブース出展をしてもらえるように協力要請をした。参加方法としては、学校向けの資料や標本と人を配置し、教員に直接アピールしてもらう、または、掲示物や配布資料を提供してもらうということにした。

参加館：天王寺動物園、海遊館、キッズプラザ大阪（展示のみ）、大阪歴史博物館や大阪市立科学館など公益財団法人大阪市博物館協会関連の施設（展示のみ）。大阪市内の施設の他に国立科学博物館も参加した。

・講演者への依頼

「学校におけるサイエンスコミュニケーション」というテーマで、大阪教育大学科学教育センター仲矢准教授に依頼し、事前に２回打ち合わせを行った。打ち合わせでは、当館の学校向けの事業や普及教育活動を説明し、講演では当館の事例を基本に学校におけるサイエンスコミュニケーションを深めるための博物館の利用へと話を広げることとなった。打ち合わせの中で、学習指導要領に載っている【小学校・中学校理科と「生物基礎」「地学基礎」の「生物」「地球」を柱とした内容の構成】の表に、関連した博物館の貸出資料を入れたものを作ると、教員には利用しやすいという意見を受けて作成し、実施日当日に配布した（別紙資料 1）。

②　広報

7 月 11 日に大阪市立自然史博物館から大阪科学大学記者クラブに対して、プレス発表を行った。大

阪府の教育センターからも博物館との連携研修として、開催直前にプレス発表を行った。そのほか、博物館のホームページへの掲載、博物館の教員メーリングリスト、友の会メーリングリスト等へ案内を配信した。大阪市・大阪府の教育センターでは、夏の研修として、学校への研修案内に掲載した。

③　準備

参加申込人数は、113 名。配布物としては、以下のようなものを用意した。

・当館の学校向け資料（下見説明会のときに配布している資料一式）

・当日の案内ガイド（別紙資料２：プログラム）

・「教員のための博物館の日」のシール（国立科学博物館からの提供）

・【小学校・中学校理科と「生物基礎」「地学基礎」の「生物」「地球」を柱とした内容の構成】と博物館の貸出資料の関連の表

そのほか、掲示物の作成、ブース用の机、椅子を用意するなど前日に会場設営を行った。

③ 当日

ブース出展館は、当日の朝から準備を行った。

スタッフ体制は、担当学芸員（8 名）と職員数名、アルバイトスタッフ２名、低年齢向けプログラム実施スタッフ２名で、このほか、大阪市・大阪府教育センターおよび大阪教育大学研修担当者が各１名来た。

詳細は、当日の案内ガイド（別紙資料２）の通り。

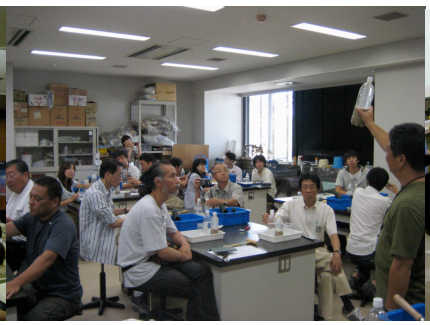
８　当日の参加者数と参加者の反応

参加者 104 名、他館のブース出展者 10 名で、合計 114 名の参加があった。参加者の内訳としては、小学校 45 名、中学校 10 名、高等学校 14 名、支援学校 9 名、大学 3 名、大学生 16 名、そのほか（博物館施設等）7 名で、小学校の教員が 43%をしめた。

当日は、参加者のアンケートを実施した。参加者のうち、約 75%は、理科分野の専門教員であった。感想としては、「とてもよかった」71%、「まあまあよかった」29%で、「よくなかった」という回答はなく、非常に満足度の高い１日であったことが感じられる。

自由回答では、「博物館の活用方法がわかった」「学芸員の専門的な話が聞けた」「本物（実物）を見ながら、さまざまな体験ができた」「今後、自分自身のためにも、学校でも博物館を利用したい」などという意見が多く見られた。詳しくは、アンケート集計（別紙資料３）を参照。

博物館の概要説明



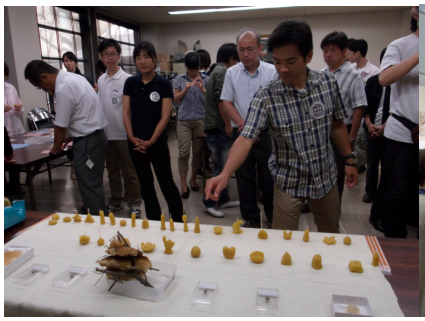
都市平野で起こる地震被害

セミの抜け殻で環境学習

ホネ見て考える肉食動物と草食動物

長居植物園で学ぶ生態系

情報センターで学ぶ大阪の自然誌



てづくりろうそく

特別展「のぞいてみようハチの世界」で学ぶ大阪の自然誌

講演会

９　事業の評価及び考察

参加者の反応から、「教員自身が博物館を楽しみ、体験し、今後の博物館の活用へつなげる」という目標は、概ね達せられたことがわかる。また、「標本という実物」があり、「学芸員という専門家」がいるという博物館の特長を充分感じてもらえた一日であったことがわかる。

今回の「教員のための博物館の日」では、大阪市・大阪府の教育センターの研修としても実施し、幅広い校種の教員に参加してもらうことができ、プログラム内容も、授業に直結したものを選ぶことができた。また、企画過程で、教育センターの教員や、大阪教育大学の教員と一緒に博物館と学校連携について考えられたことも成果として大きい。

今後考えていくべき点としては、そういった教育センターの研修と、教員のための博物館の日の特長があっているのかどうかという点である。研修枠として扱うことで、教員が参加しやすくなったことは評価できるが、「展示を見る時間があまりなかった」などの意見が聞かれるように、プログラムに参加しなくてはいけないと考える教員も多く、「自分で好きな風に時間を過ごし博物館を気軽に楽しめる」というものではなくなっているのではないか。また、研修で参加する教員には受け身ではなく、自分で博物館の利用を具体的に考えてもらう内容の方がいいのではないかということも考えらえるからである。また、校種の幅が広いために、展示解説については、話の内容の対象が絞りきれないということもあった。

「もっと博物館を利用したい」という教員の意欲に結びつき、評価できる「教員のための博物館の日」であったが、来年度以降どうしていくかは、教育センターの研修の目的、「教員のための博物館の日」自体の目的と対象をさらに見直して、考えていく必要がある。教員の中には、今後の他の館との協力や展開にも期待を寄せている意見もあったので、これをきっかけに、ますます他の館とも協力や交流を深めていきたい。